



そろそろと膨らむ蕾を見て行く人の心に待つものを
花が知るはずもなく、激しい雨風に蕾のまま地に落ちる。

そんな脱落者を踏みながら
「まだか、まだか」と花を待つ.....。

暖かな日に誘われて、そろりそろりと花は開く。
薄紅の花びらを、陽に透けるようにして開いていく。

「今が満開だ」と
時は満ちたと、人は笑い、歌う。
その頭上に咲く花びらに見惚れるものは居るのだろうか。

ひらり、ひらりと散りながら
「ああ、また来年か」という声を聞きながら
誰も何も疑問さえ持たずに過ぎ去る春を感じる。

次に咲く花は、今、この瞬間に散っている花と
とてもよく似ているけれど
多くの花の1つにすぎないのだけれど

この散ってしまう花は、もう二度と見ることは無いのだと
どうして誰も声をかけてやらないのだろう。

この木が、来年も
此処にあると信じて
此処に来年も足を運べる身体があると信じて

一期一会の花との遭遇に
一枚の花弁との遭遇に
どうして、思いは向かないのだろう。

桜は何も言わないけれど
その群れ為す花の美麗さと
人をひきつける妖艶さに

たった一枚の花びらでは為しえなかったものがあるのだと
そんな思いを抱きながら
朽ちていく、踏まれて土に帰る花の運命に

「さようなら」と囁きかけた。